幼児期における表情手がかりと状況手がかりを統合するエピソード構成

愛媛県立医療技術短期大学 澤田忠幸¹

Integration of facial and situational cues in episode construction by preschool children

Tadayuki Sawada (Ehime College of Health Science, Takooda, Tobe-cho, Iyo-gun, Ehime 791-2101)

The purpose of this study was to examine the ability of preschool children to reconcile inconsistent cues of emotion. Twenty four 4- and twenty 6-year-old children, half of them were boys and half girls, were shown a series of pictures, in which facial and situational cues were inconsistent. They were asked to construct episodes for the pictures, by integrating inconsistent events. It was found that the ability to integrate inconsistent cues increased with age. Of the three possible types of episodic explanations: situational, characteristic, and mental, only the number of mental episodic explanations increased with age. No age difference was found for situational or characteristic episodes. These results were discussed in relation to studies on children's ability of affective perspective taking.

Key words: episode construction, facial and situational cues, understanding emotion, ability of affective perspective taking.

幼児は、日常どのように他人の気持ちを推論しているのだろうか。言語的な手がかりのみならず、表情や状況などの非言語的な手がかりから他人の感情を推測することは、対人関係を維持する、あるいは愛他的行動との関連においても重要な意味をもっている（伊藤，1997）。このような、幼児が非言語的な手がかりを統合して他者の感情を理解する認知過程を検討する方法に矛盾解消課題がある（Gnepp, 1983; Hoffner & Badzinski, 1989; 久保, 1982; 笹屋, 1997）。

典型的に、矛盾解消課題では、所与の状況における登場人物の表情の性質が、その状況に基づいて推測される感情の性質とは一致しない（矛盾する）場面を描いた図版や物語を被験児に呈示して、その人物の感情の性質を同定させたり、その表情表示の理由について言語的説明を求めたりする。たとえば、“マアちゃんはアイスクリームをもらったのに泣いている”（久保, 1982）というように状況と表情表示が矛盾する刺激が使われる。一方、被験児により生成される言語的説明は、単なる手がかり情報の繰り返しではなく、状況手

がかりや表情手がかり情報には直接含意されない情報を構成的に産出した精緻のエピソードであることが求められる（Wells & Higgins, 1989）。

生成された精緻のエピソードは、どちらの手がかり情報をより重要視しているのか（Gnepp, 1983; Hoffner & Badzinski, 1989; 笹屋, 1997）、内容のもっともらしさの程度（久保, 1982）、およびどのような内容に言及しているのか（Gnepp, 1983; Hoffner & Badzinski, 1989; 岩田・田村, 1988）などの観点から分析される。このように、矛盾解消課題では子どもが他者の感情を推論・説明する能力の発達を視点取得能力（perspective taking ability）の発達から検討しようとする点に特徴がある。

これまでに、4歳児ならびに5歳児は手がかりが一致している場面と矛盾している場面を区別していること（久保, 1986; Wells & Higgins, 1989）や、手がかりが矛盾している場面でも両方の手がかりを記憶していること（Gnepp, 1983）が示されている。しかし、Gnepp (1983)、Hoffner & Badzinski (1989)、久保 (1982, 1986) などは、4歳児や5歳児では表情手がかりのみに基づいて他者の感情を推測することが多く、両手がかりを考慮した精緻のエピソードを生成することができる者はせいぜい半数にすぎないこと、および、ほとんどの子どもが生成することができるようになるのは早くて7歳以降であることを示している。そ

¹ 本研究にあたり、ご指導・ご教示いただきました京都大学文学研究科（現大阪学院大学）の清水御代明先生、京都教育大学の矢野喜夫先生ならびに岡山短期大学の須河内貢氏に感謝いたします。また、西山短期大学附属向陽幼稚園の先生方、子どもたち、ならびに愛媛十全医療学院附属病院の光長栄治先生はじめスタッフの皆様にお礼申し上げます。

の理由の一つとして、笹屋 (1997) は状況手がかりと表情手がかりから感情を推測する能力差が矛盾手がかり場面での感情推測能力に影響していることを指摘している。

一方、精緻のエピソードで言及される内容に関しては、原因帰属的な観点から主人公の内的要因に言及するのか、それとも、外的状況に言及するのか、また、年齢や課題場面により言及されやすい要因に違いが認められるのか否かが検討されてきた (Gnepp, 1983; Hoffner & Badzinski, 1989; 岩田・田村, 1988)。

岩田・田村 (1988) は、幼児が矛盾解消に用いるエピソードは主に外在的な要因によって構成されていることを明らかにしている。たとえば、“転んで怪我をしたのに笑っている”という矛盾を解消する場合、幼児は他者の内在的な要因 (ex. 強いから、我慢したから) よりも外在的な要因 (ex. ばんそうこうを貼ってもらったから、お母さんが助けてくれたから) に言及することが多かった。そして、矛盾解消に用いるエピソードで内在的要因への言及が増加するのは6歳以降であることを指摘している。

Gnepp (1983) は、4歳児のみならず7歳児や12歳児でも外的状況に言及したエピソード (“状況の精緻化” エピソード) を生成しやすいことを明らかにしている (平均69%)。これは、所与の状況に対する主人公の評価を変えるような環境を付加し、状況を再構成することで矛盾を解消するものである。一方、4歳児でも主人公の性格特性に帰属したエピソード (ex. あの子は我慢強いから) を生成するもののその数は少なく (35%)、表情を再解釈したエピソード (ex. うれし泣き、我慢している) は12歳児でもほとんど生成されなかった (9%)。

幼児期から児童期にかけて矛盾解消能力が向上する点や状況を精緻化したエピソードが最も生成されやすい点 (平均73.3%) は Hoffner & Badzinski (1989) でも追証されている。しかし、Hoffner & Badzinski (1989) はエピソードのタイプごとに検討すると、その生成されやすさに感情場面の違いが影響することを明らかにしている。すなわち、主人公の性格特性に帰属したエピソードは、嬉しいはずの状況で悲しんでいる場面 (11.0%) よりも悲しいはずの状況で笑っている場面 (39.7%) で生成されやすかった。一方、外的要因に言及した“状況の精緻化” エピソードは、悲しいはずの状況で笑っている場面 (60.3%) よりも嬉しいはずの状況で悲しんでいる場面 (86.3%) で生成されやすかったのである。

さて、以上の先行研究を検討すると少なくとも二つの問題点が認められる。第一に、笹屋 (1997) も指摘するように、幼児では状況手がかりや表情手がかりから個別に感情を推測する能力と矛盾する手がかりを統合したエピソードを生成する能力が混同されている可

能性が残る。第二に、状況手がかりと表情手がかりの両方を考慮したエピソードが生成される場合でも、感情場面の違いのみならず、他者の心的状態が明確であるか否かという状況の違い、あるいは両手がかりをどのように統合するかという統合方略の違いがエピソードで言及される内容に影響する可能性が考えられるが、この点について幼児期を対象としてその変化を検討した研究はみられない。

そこで、本研究では幼児を対象として、状況手がかりと表情手がかりのそれぞれから感情を推測することができる場合でも、手がかり間の矛盾を統合するエピソードを生成する能力やエピソードで言及される内容に年少児 (3歳・4歳児) と年長児 (5歳・6歳児) で違いが認められるのか否かを検討した²。また、感情場面ならびに状況の違いや矛盾する手がかりを統合する方略の違いにより、エピソードで言及される内容に違いが認められるのか否かについて検討した。

方 法

被験児 京都府内の幼稚園年少児 (3歳・4歳児) 24名および年長児 (5歳・6歳児) 20名。それぞれ男女同数とした。平均年齢は、年少児が4歳3か月 (3歳8か月—4歳6か月)、年長児が6歳2か月 (5歳7か月—6歳6か月) であった。

材料 喜び、悲しみ、怒り、普通を表す4枚の表情図 (岩田・田村, 1988) および6枚の状況図 (各男児用・女児用)。なお、状況図中の主人公の表情は被験児からは見えない、あるいは白抜きになっている。

課題 感情場面に状況手がかり中の主人公の行為に対する意図の有無を考慮して、以下に示す三つの課題場面を設定した³。なお、主人公の性は被験児と同一とし、各場面ごとに2課題ずつの計6課題を作成した。

1. 意図的行為-悲しみ表情場面：嬉しいはずの状況で主人公が悲しい表情をしており、主人公の行為に

² 年少児および年長児は、先行研究では4歳児および6歳児に相当する。しかし、実際には4歳児群には3歳および4歳児が、6歳児群には5歳および6歳児が含まれている。そこで、本研究では歴年齢ではなく年少児群および年長児群と記述する。また、両年齢を比較することは、他者の心的状態を理解し始める時期 (Astington, 1991) から他者の内的要因に言及したエピソードを生成できるようになる時期 (岩田・田村, 1988) への発達を検討する意義をもつ。

³ 意図的行為場面とは目標達成場面であり、状況手がかり情報に内包される主人公の行為に、通常推測される感情を喚起する意図が含まれることをさしている。すなわち、主人公以外の第三者が意図をもつ場面や主人公が感情表出を制御する意図をもつ場面とは区別される。したがって、主人公が意図的に悲しくなる場面は想定しがたく、意図的行為-喜び表情場面は設定されなかった。

対する意図が状況中に明確である目標達成場面である。“おもちゃ掘りに行って、頑張っておもちゃがたくさん取れたのに泣いている”、“頑張って雪だるまが完成したのに泣いている”の2課題を用いた。

2. 偶発的行為-悲しみ表情場面：嬉しいはずの状況で主人公が悲しい表情をしているが、状況中に主人公の意図が想定されない偶発的授与・獲得場面である。“お土産をもらったのに泣いている”、“道ばたでかわいい子犬を拾ったのに泣いている”の2課題を用いた。

3. 偶発的行為-喜び表情場面：悲しいはずの状況で主人公が喜びの表情をしており、状況中には主人公の意図が想定されない偶発的過失場面である。“転んで怪我をしたのに笑っている”、“買ってもらったアイスクリームを落としてしまったのに笑っている”の2課題を用いた。

手続き 個別実験で以下の順に行った。

1. 表情図識別課題

喜び、悲しみ、怒り、普通の4枚の表情図が示す内容を、笑っている、泣いているなどの行動語水準、および、嬉しい、悲しいなどの感情語水準の両方で理解しているかを再認法で確認した。

2. 矛盾解消課題

被験児に手がかり間の矛盾を明確にするため、状況図と表情図を個別に呈示し、あわせて状況図についての短い記述文を物語で呈示した。まず、“これから○君（被験児の名前が入る）と同じ歳のケンタ君（ヒロミちゃん）という子の話をします。”と教示し、状況図を示しながら手がかり情報を呈示した（ex. ケンタ君は、幼稚園でみんなと一緒におもちゃ掘りに行きました。そして、頑張っておもちゃをたくさん取りました）。

その後、以下の質問を行った。(a)状況手がかりに基づく感情推測と理由づけ：“ケンタ君はどんな気持ちかな（どんな顔をしているかな）？”と教示して、4枚の表情図から主人公の感情を表す表情図を選択させた。また、“どうしてケンタ君はこんなお顔をしているのかな”と教示し、理由づけを求めた。(b)エピソード生成：“でもね、ケンタ君はこんな顔をしていました。”と教示して、矛盾する表情図（ex. 悲しみ表情）を呈示した。そして、“どうしてケンタ君はこんなお顔をしているのかな？”と教示して矛盾を解消するエピソードの生成を求めた。(c)主人公の感情同定：最後に、“ケンタ君はどんな気持ちかな？ 嬉しい、悲しい、普通？”と教示して、矛盾する感情手がかり場面で主人公の感情を尋ねた。

なお、6課題の呈示順序は被験児ごとにカウンターバランスされた。

エピソードの分類規準 幼児が生成したエピソードは、(1)状況的エピソード、(2)個人的エピソード（特

性的エピソード・心理的エピソード）および(3)その他に分類された。

ここで、(1)状況的エピソードとは、被験児の視点から主人公をめぐる状況になんらかの要素をつけ加えることによって状況を再構成する場合をさす。たとえば、課題中には登場していない第三者を介入させる（ex. 友達に取られた）、あるいは、対象と主人公との相互関係に言及する場合（ex. イヌが引っかいた）が当てはまる。また、主人公の身体的状態に言及する場合（ex. 手が冷たい、血が止まった）もこれに含まれる。

これらは、岩田・田村（1988）では外在的エピソードに、Gnepp（1983）およびHoffner & Badzinski（1989）の分類では、状況の精緻化に、Wells & Higgins（1989）では出来事の内包的特徴の描写に対応するものである。

一方、(2)個人的エピソードとは、主人公の性格特性や願望・思考内容など内的要因に言及するもので、二つのサブタイプを設けた。このうち、(2-a)特性的エピソードとは、被験児の視点から主人公の願望や性格特性などに言及するエピソードをさす（ex. お菓子きらい、男の子のだから）。一方、(2-b)心理的エピソードとは、新たな要素をつけ加えることなしに所与の状況に対する主人公の意味判断を変えてしまう（ex. おいしいので食べなくてすむ）、または、主人公が感情の表出を制御していると自発的に解釈して表情手がかりの意味を再解釈する場合（ex. 恥ずかしいので我慢した）をさす。この場合、主人公の視点取りを考慮して、与えられた状況や表情の意味を変換することが必要となると考えられる。

これら個人的エピソードは、岩田・田村（1988）の分類では内在的エピソードに、Wells & Higgins（1989）では、主人公の内包的反応の推測、すなわち、出来事のある側面に対する主人公の評価に言及した反応に対応し、Gnepp（1983）の分類では、主人公の特性への帰属、感情を隠す表情、表情の再解釈を含むものである。

また、(3)その他のエピソードとは、課題場面の矛盾解消には直接無関係、あるいは推測された主人公の感情と一致しない等の不適切なエピソードおよび無反応をさす。

結 果

個々の手がかりから感情を推測する能力による影響（笹屋、1997）を統制するために、表情図識別課題に正答し、かつ矛盾解消課題で状況手がかりに基づく感情推測と理由づけ質問に6課題すべてに正答した被験児の反応のみを分析の対象とした。その結果、年少児4名が分析から除外された。各被験児の反応は分類規準に従って分類され、年齢および課題場面ごとに生成数

Table 1
年齢ごとの平均エピソード生成数

エピソード類型	年齢群	
	年少児群 (平均年齢 4 歳 3 か月)	年長児群 (平均年齢 6 歳 2 か月)
状況的エピソード	2.65 (1.69)	2.30 (1.63)
個人的エピソード	1.65 (1.14)	3.15 (1.63)
特性的エピソード	0.75 (0.79)	1.20 (1.40)
心理的エピソード	0.90 (1.12)	1.95 (1.32)

() 内は標準偏差, 両年齢群ともに $N=20$.

の平均値を求めた。エピソードタイプごとの年齢群別平均生成数を Table 1 に、課題場面別平均生成数を Figure 1 に示す。

年齢および課題場面の影響

まず、被験児の年齢や課題場面によって、エピソードの生成されやすさに違いが認められるのか否かを検討する。そこで、これらの条件ごとにその他に分類されたエピソードを除くエピソード生成数の平均値を算出し、2 (年齢：年少児, 年長児) $\times$ 3 (課題場面：意図的行為-悲しみ表情場面, 偶発的行為-悲しみ表情場面, 偶発的行為-喜び表情場面) の分散分析を行った。その結果、年齢の主効果が有意であった ($F(1, 38)=8.987, p<.005$)。すなわち、年少児 (3 歳・4 歳児) よりも年長児 (5 歳・6 歳児) のほうが矛盾する感情手がかりを統合するエピソードを生成することができた (平均生成数: $5.45>4.30$, 以下同様に記す)。

次に、生成されたエピソードの内容ごとに検討するために、個人的エピソードおよび状況的エピソードごとの生成数の平均値を基に、2 (年齢) $\times$ 3 (課題場面) の分散分析を行った。

その結果、個人的エピソードでは、年齢の主効果が有意であった ($F(1, 38)=10.815, p<.003$)。すなわち、年少児よりも年長児のほうが主人公の内的要因に

言及したエピソードを生成することができた ($3.15>1.65$)。また、課題場面の主効果が有意であった ($F(2, 76)=10.345, p<.001$)。テューキーの HSD 法により多重比較を行ったところ、意図的行為-悲しみ表情場面よりも偶発的行為-喜び表情場面有意にエピソード生成数が多かった ($1.18>0.43$)。

さらに、個人的エピソードを二つのサブタイプに分けて先と同様に生成数の平均値を基に 2×3 の分散分析を行った。その結果、特性的エピソードでは、年齢の主効果および年齢と課題場面の交互作用は認められず、課題場面の主効果のみが有意であった ($F(2, 76)=5.177, p<.008$)。多重比較を行ったところ、主人公の意図関与の有無にかかわらず、悲しみ表情場面よりも喜び表情場面でエピソード生成数が多かった ($0.53>0.23$)。一方、心理的エピソードでは、年齢の主効果が有意であった ($F(1, 38)=7.013, p<.011$)。すなわち、年少児 (3 歳・4 歳児) よりも年長児 (5 歳・6 歳児) のほうが心理的エピソードの生成数が多かった ($1.95>0.90$)。また、課題場面の主効果が有意であった ($F(2, 76)=6.303, p<.003$)。多重比較を行ったところ、感情場面にかかわらず、意図的行為場面よりも偶発的行為場面のほうがエピソード生成数が多かった ($0.61>0.20$)。

これに対し、状況的エピソードについても同様の分

Figure 1. 課題場面ごとの平均エピソード生成数

Table 2
同定感情ごとの平均エピソード生成数

エピソード類型	年齢群			
	年少児群		年長児群	
	(平均年齢 4 歳 3 か月)		(平均年齢 6 歳 2 か月)	
	喜び同定	悲しみ同定	喜び同定	悲しみ同定
状況的エピソード	1.55 (1.28)	1.10 (1.17)	0.90 (1.07)	1.40 (1.31)
特性的エピソード	0.15 (0.37)	0.55 (0.69)	0.40 (0.50)	0.80 (1.20)
心理的エピソード	0.30 (0.57)	0.50 (0.76)	0.70 (1.03)	1.10 (1.07)

() 内は標準偏差, 両年齢群ともに $N=20$.

析を行ったところ, 年齢の主効果および年齢と課題場面の交互作用は認められず, 課題場面の主効果のみが有意であった ($F(2, 76)=16.848, p<.001$). 多重比較を行ったところ, 感情場面にかかわらず, 偶発的行為場面よりも意図的行為場面のほうが有意にエピソード生成数が多かった ($1.30>0.59$).

同定感情および依存手がかりの影響

ここでは, 被験児自身が同定した主人公の感情や感情を推測する際に重視した手がかりのタイプの違いが, 生成されるエピソードのタイプ (状況的・特性的・心理的) に影響するののか否かについて検討する. そこで, 課題場面を込みにして, 年齢および被験児が同定した感情ごとに, 三つのタイプのエピソードの生成数の平均値を算出した (Table 2). そして, エピソードのタイプごとに平均値を基に, 2(年齢: 年少児, 年長児) $\times$ 2(同定感情: 喜び, 悲しみ) の分散分析を行った.

その結果, 特性的エピソードで同定感情の主効果が有意であった ($F(1, 38)=5.842, p<.019$). すなわち, 主人公の感情を悲しみと同定した場合に喜びと同定した場合よりも有意にエピソード生成数が多かった. また, 心理的エピソードで年齢の主効果が有意であった ($F(1, 38)=6.188, p<.016$).

次に, 主人公の感情同定質問で選択された感情から, 被験児が感情を同定する際に重視している手がかりを判定した. たとえば, 嬉しいと回答した場合, 悲しみ表情場面では状況手がかり依存, 喜び表情場面では表情手がかり依存とみなした. 一方, 悲しいと回答したとき, 悲しみ表情場面では表情手がかり依存, 喜び表情場面では状況手がかり依存とみなされた.

年齢および依存手がかりのタイプごとに三つのタイプのエピソード生成数の平均値を算出し, この平均値を基に各エピソードタイプごとに, 2(年齢: 年少児, 年長児) $\times$ 2(依存手がかりのタイプ: 状況手がかり, 表情手がかり) の分散分析を行った. しかし, 心理的エピソードで年齢の主効果 ($F(1, 38)=6.188, p<$

.016) が確認された以外, いずれのエピソードのタイプでも依存手がかりの主効果および両要因の交互作用は示されなかった.

エピソードのタイプ間の関係

最後に, エピソードのタイプ (状況的・特性的・心理的) 間で生成されやすさに関連性が認められるのか否かを検討する. そこで, 年齢および課題場面を込みにして, 各被験児のエピソードタイプごとの生成数を基にピアソンの積率相関係数を算出した. その結果, 状況的エピソードと特性的エピソード ($r=-.361, t(38)=2.39, p<.05$), および状況的エピソードと心理的エピソード ($r=-.496, t(38)=3.52, p<.01$) との間に負の相関が有意であった. しかし, 特性的エピソードと心理的エピソードの間には有意な相関は認められなかった ($r=-.180, t(38)=1.13, ns$).

また, エピソードのタイプごとの平均生成数について 1 要因の分散分析を行った. その結果, 主効果が有意であった ($F(2, 78)=9.124, p<.001$). 多重比較を行ったところ, 特性的エピソードと心理的エピソードの生成数はともに状況的エピソードよりも有意に少なかった.

考 察

本結果を要約すると以下ようになる. (1) 年少児 (3 歳・4 歳児) よりも年長児 (5 歳・6 歳児) のほうが矛盾する状況手がかりと表情手がかりを統合したエピソードを生成することができた. (2) 言及されたエピソードの内容ごとにみると, 生成されやすいエピソードのタイプに年齢や課題場面による違いが認められた.

(1) の結果は, 従来の研究結果 (Gnepp, 1983; Gove Keating, 1979; Hoffner & Badzinski, 1989; 岩田・田村, 1988; 久保, 1982; 笹屋, 1997) を発展させ, 幼児期を通じて矛盾解消能力が向上することを明確に示したものである.

第一に, 本研究では, Gnepp (1983), Hoffner &

Badzinski (1989), 伊藤 (1997), 岩田・田村 (1988) および久保 (1982) などに比べ, 高いエピソード生成率が示された (年少児で平均 71.7%, 年長児で 90.8%)。これは, 状況手がかりから感情を推測させた後に矛盾する表情手がかりを個別に呈示したことで手がかり間の矛盾が明確化され, その結果, 幼児のエピソード生成が促進されたことによると考えられる。この結果は 3 歳ならびに 4 歳児でも矛盾する手がかりを統合する能力を有することを示すものである。

第二に, 幼児の手がかり利用に関して, 本研究では, Gnepp (1983), Hoffner & Badzinski (1989), 笹屋 (1997) などとは異なり, 年齢や生成されるエピソードのタイプ (状況的・特性的・心理的) によって, 被験児が特定の手がかりを重視するという傾向は認められなかった。すなわち, 状況手がかりと表情手がかりを個別の図版で呈示した本研究の手続きによって, 特定の手がかりへの注目やエピソードの生成が促進されることはなかった。このことから, 幼児でも状況手がかりと表情手がかりの両方から感情を推測する能力を備えている場合には, 両手がかりを考慮しつつ, 場面に応じて重視する手がかりを変える柔軟性をもつことが示唆される。一方, 先行研究の多くで示された幼児期の表情手がかり依存傾向は, 笹屋 (1997) が明らかにしたように, 状況手がかりと表情手がかりから感情を推測する能力の違いが反映された結果と考えられる。

本研究では, これらの前提のもとでも, 幼児期を通じて手がかりを統合する能力 (情緒的視点取得能力) が発達することが確認された。

(2)の結果は, (1)で示された変化が単一の能力の発達によるものではないことを示している。すなわち, 幼児は思考操作の違いを反映した複合能力としての情緒的視点取得能力を有しており, 手がかりを統合する際に, 年齢や場面により質的に異なる思考操作を用いていることを示すものである。

Gove & Keating (1979) や Urberg & Docherty (1976) は, 視点取得能力を継時的視点取得能力と同時的視点取得能力に区別している。ここで, 継時的視点取得能力とは, 異なる二つの視点を同一対象に帰属させるものの, 両視点を因果的に統合する能力である。この場合, 被験児は“観察者の立場”から矛盾する手がかりを統合することができる。したがって, 両手がかりを媒介する要因は, 外的, 内的いずれの要因によっても可能となる。また, 内的要因に言及する場合でも, 他者 (主人公) の思考内容までを理解する必要はない。先行研究 (Gnepp, 1983; Gove & Keating, 1979; Hoffner & Badzinski, 1989; 岩田・田村, 1988 など) で検討されてきたエピソード内容の発達差は, 主に継時的視点取得能力における内的・外的次元についての理解の違いに注目したものである。

一方, 同時的視点取得能力とは, 二つの視点を同時に同一対象に帰属する能力である。この場合, 他者 (主人公) の立場から矛盾する両手がかりを上書き (overwrite) して統合することが求められる。したがって, 他者の思考内容, あるいは状況についての評価を理解することが必要となり, 継時的視点取得能力に比べ高次の思考操作が求められる。

本研究で分類されたエピソードのうち, 状況的エピソードと特性的エピソードは継時的視点取得能力を, 心理的エピソードは同時的視点取得能力を反映していると考えられる。心理的エピソードの生成数は, 継時的視点取得能力を反映した状況的エピソードと特性的エピソードの合計生成数よりも少なかったが, 年少児から年長児にかけて増加することが明らかとなった。一方, 特性的エピソードの生成数が状況的エピソードよりも少ない点では先行研究結果を追証したが, 両エピソードの生成されやすさは, 年少児と年長児と異なることが明らかとなった。

エピソードのタイプに視点取得能力の違いが反映されていることは, 他者の内的要因に言及したエピソード (個人的エピソード) が生成される場合でも, 幼児は心理的エピソードと特性的エピソードを体系的に区別していることから裏づけられる。

第一に, 心理的エピソードは, 同定された主人公の感情や感情場面の違いにかかわらず, 主人公の意図が明確な場面よりも意図が想定されない場面で生成されやすかった。一方, 特性的エピソードは, 主人公の意図が明確であるか否かにかかわらず, 嬉しいはずの状況で悲しい表情をしている場面よりも悲しいはずの状況で嬉しい表情をしている場面で生成されやすかった。特に, 主人公の感情が悲しみと同定された場合に, 喜びと同定された場合よりも生成されやすかった。

第二に, 心理的エピソードと特性的エピソードの生成されやすさには関連性が認められなかった。そして, 他者の内的要因に言及したエピソードが生成されないときには, 視点取得能力のレベルにかかわらず状況に言及されやすかった。

他者 (主人公) の観点から状況手がかりと表情手がかりを統合する場合, 心的状態としての意図を理解しなければならない。なぜなら, 言及する他者の思考内容がすでに明確な意図と拮抗する場合, 新たに心的状態を上書きすることは困難であり, 状況に言及するほうが容易となるからである。Astington (1991) によれば, 子どもは 4-5 歳ころ, 行為とは区別された心的状態としての意図を理解できるようになることが示されている。本研究でも, 心理的エピソードが生成されやすい場面は幼児期を通じて異ならなかったことから, 3 歳ならびに 4 歳児でも他者の心的状態について暗黙 (implicit) の認識をもっていると考えられる。

そして、3歳ならびに4歳ころから5歳ならびに6歳にかけて同時的視点取得能力が発達することにより、他者の心的状態を考慮した心理的エピソードの生成が増加したと考えられる。

一方、幼児期を通じて他者の感情が悲しみと同定された場面で、特性的エピソードが生成されやすかった点は、自然場面での他者の感情についての因果的理解を検討した Fabes, Eisenberg, Nyman, & Mischealieu (1991) の結果とも一致する。Fabes et al. (1991) は、3歳児でも5歳児と同様に、悲しみなどのネガティブな感情の原因は他者の内的要因により説明されやすいことを明らかにしている。このことから、継時的視点取得能力により矛盾する手がかりを統合する場合、自然場面と同様に観察者の視点から判断されていることがわかる。

しかし、状況的エピソードについては、Fabes et al. (1991) とは異なり、同定感情との関連性は示されず、生成数も幼児期を通じて異ならなかった。これは、状況的エピソードが生成される過程に、特性的エピソードと心理的エピソードが生成されない両方の場合の要因が含まれたことが影響したためと考えられる。

以上の点を総合すると、幼児は矛盾する手がかりを統合して他者の感情を推論する際に、視点取得能力の違いを反映した異なる二つの方略をもつことが明らかとなった。そして、幼児期にみられる感情場面での矛盾解消能力の向上は、矛盾する手がかりを統合する能力自体や他者の内的要因に言及する能力全般が発達することによるものではない。同時的視点取得能力により、他者の観点から思考内容を考慮したエピソードを生成する能力が発達することにあると考えられる。

引用文献

- Astington, J. W. 1991 Intention in child's theory of mind. In D. Frye & C. Moore (Eds.), *Children's theories of mind*. Hillsdale, NJ: Erlbaum. Pp. 157-172.
- Fabes, R. A., Eisenberg, N., Nyman, M., & Mischealieu, Q. 1991 Young children's appraisals of others' spontaneous emotional reactions. *Developmental Psychology*, **27**, 858-866.
- Gnepp, J. 1983 Children's social sensitivity: Inferring emotions from conflicting cues. *Developmental Psychology*, **19**, 805-814.
- Gove, F. L., & Keating, D. P. 1979 Empathic role-taking precursors. *Developmental Psychology*, **15**, 594-600.
- Hoffner, C., & Badzinski, D. M. 1989 Children's integration of facial and situational cues to emotion. *Child Development*, **60**, 411-422.
- 伊藤順子 1997 幼児の向社会的行動における他者の感情解釈の役割 発達心理学研究, **8**, 111-120.
- (Ito, J. 1997 Relationship between inference of feeling and prosocial behavior in preschool children. *Japanese Journal of Developmental Psychology*, **8**, 111-120.)
- 岩田純一・田村清美 1988 矛盾解消のためのエピソード生成に及ぼすモデル効果 金沢大学教育学部紀要 (教育科学編), **37**, 99-104.
- (Iwata, J., & Tamura, K. 1988 The model's effect on episode construction for relating "inconsistent" informations. *Bulletin of the Faculty of Education, Kanazawa University (Educational Sciences)*, **37**, 99-104.)
- 久保ゆかり 1982 幼児における矛盾する出来事のエピソード構成による理解 教育心理学研究, **30**, 239-243.
- (Kubo, Y.)
- 久保ゆかり 1986 矛盾する事象の理解におけるエピソードの想定について 東京大学教育学部紀要, **26**, 235-243.
- (Kubo, Y. 1986 The theoretical examination of episode construction in inconsistent information understanding. *Bulletin of the Graduate School of Education, The University of Tokyo*, **26**, 235-243.)
- 笹屋里絵 1997 表情及び状況手掛りからの他者感情推測 教育心理学研究, **45**, 312-319.
- (Sasaya, R. 1997 Inferring others' emotion from facial and situational cues. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **45**, 312-319.)
- Urberg, K. A., & Docherty, E. M. 1976 Development of role-taking skills in young children. *Developmental Psychology*, **12**, 198-203.
- Wells, R. S., & Higgins, E. T. 1989 Inferring emotions from multiple cues: Revealing age-related differences in "How" without differences in "Can". *Journal of Personality*, **57**, 747-771.

——1999. 1. 22 受稿, 2000. 3. 4 受理——